最終回

「感動の共感」が〝絆（きずな）〟をつくる

愛知・生活介護事業所「来夢」 南 寿樹

今月のテーマ

最終回は愛知県の「人形劇団ポップコーン」と、半世紀近い歴史をもつ「愛知県しょうがい者の生活を豊かにする会」の2つの活動に参加する青年たちの姿から、余暇活動がつくる仲間関係と余暇活動の意味について考えます。

「隆司君には、愛があるなあ」

2019年4月に開所した生活介護事業所「来夢（らいむ）」に通ってくる渉君（26歳）と隆司君（35歳）。

渉君は、言葉での指示は少し理解ができるものの、生活の各場面での気持ちの切り替えが苦手。不安になると自分の気持ちをうまく伝えられずに大きな声で「あー」と叫び、自分の顔をたたき続けます。

隆司君は、言葉の理解はできますが、発声は「あー」「あうん」がほとんど。それに強弱をつけたり表情を変えたりして意思を伝えます。自分の思いを伝えたいとの意欲が強く、受け止めてくれない相手にはつねったり噛みついたりします。

開所して間もなくの頃。

「あー」バンバンバン～。渉君が叫びながら自分の顔をたたく。いつもより激しい。私は「落ち着いて。痛いからやめようか」とおさめようとする。しかし顔たたきは止まらない。

（そうだ。エアトランポリンなら落ち着くかもしれない）と考え、モーターで空気を入れて膨らませ、渉君を座らせる。すると隆司君が「あー」と言い、自分の顔を指さしながらやってくる。（僕も一緒にやる）という意味だろう。そして渉君のとなりに座ると、渉君の手をそっと握って、顔たたきを止めようとする。渉君は、隆司君の手を振りほどいて自分の顔をたたき続ける。隆司君は、めげずに渉君とやわらかく手をつなごうとする。渉君は、隆司君の差し伸べた手に一瞬自分からも手を差し出す時があるものの、すぐに顔たたきに戻る。それでも隆司君は手を差し伸べる。その繰り返しが続く…やがて渉君はたたくのをやめた。それどころか、なんと機嫌のよい時の裏声を出して体を左右に揺らし始めた。

（不安にならなくてもいいよ。僕がついてるから）とでもいうような隆司君の心が通じたようだ。

「隆司君、えらい！　あんたには愛があるなあ」

私が言うと、肢体障害のみずほさん（44歳）も「確かに愛があるなあ」と繰り返し、まわりのスタッフから笑いと拍手が起きた。

渉君と隆司君のこの強い絆。二人は、それぞれ他の事業所も利用しているため、一緒になるのは月曜日だけ。それでもここまでの関係になったのには、二つの余暇活動があったからだと推測します。

渉さん（左）と隆司さん（右）

人形劇団ポップコーン

一つは、地元で活動する人形劇団ポップコーン。きっかけは2002年。全障研豊明サークルの企画で、そのころプロとして活動していた人形劇団「紙風船」（車いすの人形劇団）の公演を企画した時です。訪問教育（教員が家庭に出向き授業をする）を受けている志保さん（高1）が「私は観たいんじゃなく、やりたいの」と強く主張。それは「いつも家の中で同じ天井を見ながら暮らすのはもう嫌だ。私も外の世界に出たい」という心からの叫びでした。その声に押されて障がい児6人とその家族、そしてボランティア（計23人）で旗揚げをしたのです。

渉君は、当時小学部1年生。人形を持たすと投げるので、「服に人形を縫い付けて演じよう」（お母さん）という表現方法で、役者として参加し続けています。隆司君は3年前からメンバーになりました。小道具や人形の操作だけでなく、脚本に「あー」という発声を生かしたセリフを入れることで、中心的な役者として活躍しています。

毎月第4日曜日に、社会福祉協議会の理解を得、福祉会館の大会議室を利用させてもらっています。全員で作品の構想を練り、裁縫はお母さん方、大きな人形はお父さん方、障がいのある仲間は色塗りなど大まかに分業しての作品づくり。全員での練習。そして公演。また気候の良い時には遊園地などに出かけたり、バーベキューを楽しんだりします。お父さんたちの参加が心強く、県内外の公演ツアーでのマイクロバスの運転やバーベキューの準備や片付けなどで助けられています。

「生活を豊かにする会」の旅行

もう一つは、私が主宰する「愛知県しょうがい者の生活を豊かにする会（豊かにする会）」の旅行。渉君と隆司君は、何年も家族ぐるみで参加しています。

1972年、「就学猶予」「就学免除」という、障がい児が学校に通いたくても通えない時代、「愛知県障害児の不就学をなくす会」が、名古屋大学の本山政雄教授（後に名古屋市長）を会長として結成さ